第７回「（仮称）市民公益活動推進のための基本指針」検討委員会議事録

Ⅰ　日　時　平成１８年１０月１３ 日（金）　午後５時から午後７時１０分
Ⅱ　場　所　市役所３階和室
Ⅲ　出席者
　〇検討委員　８名
　　荒木昭次郎委員・中島久美子委員・村山知之委員・安達由美委員
　　丸山鶴雄委員・森山弘子委員・鳥飼吉継委員・益田香代子委員
　〇事務局　市民協働課長以下職員４名

Ⅳ　議題内容
　〇これまでの内容を振り返って

Ⅴ　議事録

これまでの内容を振り返って

・委託や支援といった言葉の表現の仕方や、市職員の取り扱い（指針の中では市職員も一般住民として捉えていいのではないか）についての課題が前回の議論であがっていた。
・市民活動団体の中の頂点に行政があるという意識ではダメである。
・行政は、行政ができる範囲のことをやっていき、市民活動団体と横並びの関係であるべき。
・「支援」に代わる言葉として、共に助ける「共助」という言葉が必要ではないか。
・抽象的な話の中（頭の中で考える時）での「協働」には、行政は加わってくるが、実際に活動に移る時に行政は活動の中に入ってこないのではないかという心配がある。
・知的所有権は行政、それ以外の労力提供は行政以外が行うという感がある。
・市民と共に汗をかかないと、本当の協働はあり得ないのではないか。
・実際の活動は地域で行われており、行政はそれにどう関わっていくのか。
・市の職員も一人の市民として、地域に入っていくべきである。
・市職員も一人の市民として、地域と一緒に活動をしようという働きかけをどの様に行うのか、指針策定をする上で重要なポイントではないか。
・継続性を担保する活動に踏み込んでいく必要がある。
・次世代を担う人材の発掘が大きな問題である。
・公益活動に参加する学生も一部には存在し、少しずつではあるが若い活動者のすそ野は広がりつつあるものの、まだ活動に興味を示さない学生が多い。
・市職員にも地域活動への参加協力を呼びかけたいが、地域に市職員が住んでいるのかがわからない。以前はそういう情報も入ってきたが、個人情報保護制度の影響もあるのか、その様な情報はなかなかつかみにくくなっている。

・地域活動に頑張っている市職員もいる。その様な職員を評価してあげるシステムが必要ではないか。
・仕事が忙しい方は、それを放置してまでボランティア活動に参加するのは難しい。
・内面的自己満足感が出てくればいいのではないか。
・昨年度、市民と市職員合同のワークショップに参加したが、その時は市民と行政が同じ目線で話をすることができたのに、行政マンに戻ると目線のズレが生じる。
・公務員とか職業に関係なく、生活者市民レベルで物事を考えることが大事である。
・物事を考える時、普通の生活者市民のレベルでスタートさせ、その中で一般市民ができること、行政ができることをそれぞれやっていかなければならないのではないか。
・それぞれ仕事上で立場は異なり、全て同じ見方はできないかもしれないが、仕事から離れたら、皆一般市民なので、この指針はそういった一般市民の立場で見て欲しい。
・生活者市民として生活を営む時、皆がそれぞれの特技を発揮し、市職員もその特技を発揮すべきだが、公務員だとの色眼鏡で周りが見るため、市職員が参加しづらい雰囲気になっているのではないか。
・公務員の仕事だけでなく、色んな仕事が世の中の役に立っている。日頃している仕事は違っても、目指すものは皆一緒である。
・子どもたちが地域で活動する時、最初は皆一生懸命に楽しくやっているが、１年２年と時間が経つにつれ、我々大人と同じ感覚になるのか、「自分はこんなに頑張っているのに、あの子は何もしない。」だから「ああしろ、こうしろ」と他の子供に対し命令口調になってしまう子がいる。その子どもは、目線が変わってきているのだと思う。
・目線が変わる（上になる）事で、他の者からすると、楽しい活動もつまらないものになり、続ける意欲を失っていく。
・命令されたり、しかられたりするのがいやなのは大人も一緒で、逆に褒められるとうれしいのは、大人も子どもも一緒である。
・市民活動を上から押付けるような指針でないほうが良いと思う。
・誰もが読みやすい文章の指針にできればいいのではないか。
・「行政に求められること」の中に「行政はもっと市民と一緒に汗をかくべきだ」という様なニュアンスが読み取れる文章にする必要がある。
・気軽に活動ができる環境の整備が必要である。
・市民活動に参加する事が、気軽なことであり重荷を背負う様なものにならないようにしなければならない。その様なことが伝わる文章も必要。
・今後、団体の役員等の後継者が出てこない恐れもあるので、重荷を背負うものではなく、楽しみがないと汗をかこうとしないものである。
・子どもにもわかるような文章が必要である。
・「定義」という言葉が硬いのではないか、基本的な考え方など、わかりやすい表現が必要である。

・市民に年齢は関係ないのか、子どもも対象になるのか。
・子どもの目線で考える必要もあるので、子どもも市民として捉える必要がある。
・「市民公益活動」の副題として、例えば「やれば心が温かくなる活動」とかはどうか。
・指針の表題として、例えば「あなたとわたしのまちづくりの羅針盤」はどうか